

【短報】対馬におけるムネアカツヤケシコメツキの記録

ムネアカツヤケシコメツキ *Megapenthes opacus* Candèze, 1873 は、北海道、本州、四国、九州、粟島、屋久島まで、広く分布する種である。ミズキなどの花で採集されるが、個体数は少ない。近年は生木の洞から見いだされることが明らかになり、山地に限らず、平地の都会でも発見されるようになった。

筆者は、これまで記録のなかった対馬において採集された本種の個体を検することができたので、ここに報告しておきたい。

1 ♀, 長崎県対馬上県町山田山 (クマノミズキの花), 27. VI. 2011, 西澤正隆採集 (筆者保管)。

本文を草するにあたり、標本をご恵与くださった、たびら昆虫自然園の西澤正隆氏に厚くお礼申し上げます。

引用文献

Kishii, T., 1999. A catalogue of the family Elateridae (Coleoptera) of Japan. Bulletin of the Heian High School, Kyoto, (42): 1-144.

(鈴木 互 法政大学第二高等学校生物科)

書評

「アリの巣をめぐる冒険 未踏の調査地は足下に」フィールドの生物学⑧ 東海大学出版会
224pp. 定価2,000円
2012年9月20日発行 丸山宗利著

本書は、今年38歳になる九州大学の丸山さんが、その半生に相当する研究生活を振り返ったエッセイである。研究過程での紆余曲折、様々な人との出会い、そして様々な虫との出会い、それらが素晴らしい多くの写真やスケッチとともに描かれている。一般の読者を想定し平易な文章が書かれているので、一気に読むことができる。また、コラムでは分類学や採集、最近の発見についても書かれており、生物学を専門に学ぶ学生などにも有用である。最近の発見として、カンボジアで採集したという未記載の珍奇なコガネムシの写真(新属新種)も掲載されており、これは一見の価値がある。それらを眺めるだけでも楽しめる。

本書を読むと、丸山さんのこれまでの研究の方向性や研究の枝葉の広げ方は、分類学を志すものとしてとても参考になる。加えて研究者として歩むべき導線も示されており、研究者を志す学生はぜひとも手にとって読んでもらいたい。それは決して同じ轍を踏めということではなく、道の作り

方を参考にしろということだ。

「あふれる情熱がなければ、生き残ることができない」—アップルのカリスマ経営者だったスティーブ・ジョブズの言葉である。本書で暴露しているが、丸山さん自身は採集がそんなには得意な訳ではなく、また研究者生活も順風満帆であった訳でもない。丸山さんのこれまでの輝かしい研究成果や発見は、研究や生きもの(昆虫)に真摯に向き合い、あふれる情熱を傾けてきた結果である。また多くの人に支えられてきた結果でもあるのだ。そうやってセレンディピティを引き込み、今の彼が存在するのだ。

本書の行間に隠されている苦悩や努力を感じ取って、自分の立ち位置・進むべき道をしっかり見つめて欲しい、おそらく丸山さんの一番書きたかったところではないだろうか。若手研究者、そして研究者の卵は、本書を読んで丸山さんからのメッセージをしっかりと心に刻みたい。

余談ではあるが、本シリーズは若手の研究者が多く執筆しており、どれもお勧めである。特に岸本圭子著の「虫をとおして森をみる 熱帯雨林の昆虫の多様性(フィールドの生物学④)」は、熱帯のハムシ群集の話が出てきて面白いし、女性研究者からの目線は斬新さを感じる人が多い。

(愛媛大学ミュージアム 吉富博之)

